にいつ こういち●横浜市生まれ。立教大学大学院博士課程を経て、同大学社会学部助手。69〜70年、シュリラム産業関係研究所（ニューデリー）。78〜06年、国際基督教大学勤務。06年10月〜07年3月までヴィッショバラティ大学客員教授、07年11月〜08年３月末まで国立フィリピン大学客員教授予定。専門は開発社会学、国際社会学。研究のフィールドは東南アジア、南アジア。主な編著に『現代アジアのスラム』『転機に立つタイ』『アジアの大都市 マニラ』『グローバル化とアジア社会』。MISHOPスタディツアーの会代表

→シャンティニケタンの近郊、少数民族サンタルの集落にて。右端が筆者。左端は案内役の学生　写真提供：筆者（以下も同じ）

リレーエッセイ
海外派遣専門家たより

希薄化する伝統的な社会意識

「タゴール大学」で日本社会論を教える

新津晃一（にいつ こういち）
国際基督教大学名誉教授
アジア文化研究所客員所員

近年、インドはその急激な経済発展により世界の注目を浴びている。特に日本にとって、今年は日印文化協定締結50周年にあたり、新聞、雑誌、テレビでは多くのインドに関する特集記事、特集番組が編集された。インドは１９９１年の経済自由化以来、年平均６％以上という世界でも高い水準の経済成長率を維持しており、２０５０年ごろには人口規模、経済規模において、世界最大の大国に成長すると予想されている。しかし、島嶼（とうしょ）部をのぞく西ヨーロッパ全域に近い面積を持つ広大なインドは州ごとによる格差も激しく、もっとも富裕なゴア州ともっとも貧困なビハール州とでは一人当たりの平均所得で約８倍の格差があるといわれている。

西ベンガル州の州都は有名なコルカタで、かつては大英帝国植民地統治の拠点都市として繁栄したが、長期間共産党政権であったため、多くの大企業がムンバイを始めとする他州に移動してしまい、産業発展では衰退の一途をたどってきた。近年共産党政権下、産業発展にも力を入れ始めているが、工業用地確保をめぐって農民との間で厳しい軋轢を生んでいる。

私が半年間、ジャパンファウンデーション派遣による客員教授として勤務したシャンティニケタンのヴィッショバラティ大学（日本では通称タゴール国際大学）はコルカタから急行列車で約２時間半の地にあり、のどかでゆったりしたたたずまいの大学である。この大学は１９０５年、ラビンドラナート・タゴール（アジアではじめてノーベル文学賞受賞）により私塾として設立、国立大学として引き継がれ、現在に至っている。

わたしはこの大学の日本学科で日本社会論を担当し、07年３月31日に帰国したが、まことに興味深い半年間であった。特に私は38年前、約１年半ニューデリーのシュリラム産業関係研究所（現在はデリー大学内の一研究所）の研究員として滞在したことがあり、何かにつけ、この間の社会変化の実態に興味をもった。もちろん、西ベンガル州とニューデリーとでは文化的にもかなりの違いがあり、ま

た研究所の研究員と大学の教員とでは社会的立場上、かなりの違いがあることは言うまでもない。

私は日本社会論のクラスや私の家を開放して行なった「日本語クラブ」の中で、日本を理解してもらうために、しばしばインドとの比較を行ないつつ、学生たちと大いに語り合い、議論した。また私たち日本人はどのような関心をインドに対して持っているのかなどについて、率直に話し合う機会を得ることができた。

ヴィッショバラティ大学日本学科の正面玄関にて、学生たちと。後列右より２人目が筆者。インドが最も誇りとする詩聖タゴールの存在は今日においても大きな影響力を保持し、他の国立大学とはかなり異なった性格を有している。タゴールの父の誕生日に当たる水曜日が毎週の休日で、火曜日半日。幼稚園からの一貫教育を目指しており、ヴィッショバラティは大学を含む幼稚園からの教育機関全体を指す。教育の基本的理念は芸術を基礎とした創造性教育であり、国際交流の拠点大学を指向している

まず、カースト意識の変化であるが、38年前のインドでは低カーストの人と一緒に同じ機械に触れて作業をすると、その後バケツの水を５００回かぶって清めなくてはならなかった。しかし、徐々にバケツの底に１００の穴を開け5回かぶる、やがては手を洗うだけになる、といったような状況が進行していると、工場労働者の研究をしていた研究員から聞いた。

また、かつては低カーストの作った料理を上位カーストの者が食べることはなく、従って、ニューデリー中心街にある有名レストランの料理人は、すべてブラーマン（バラモン）であるとも言われていた。あるいは、生理中の女性は料理をしてはいけない、といったタブーもあり、ブラーマンの男性は、幼いころから料理を自分で作るよう習慣づけられており、料理がうまい。ある日、ブラーマンの家に招待されたが、外国人もアウトカーストに属するため、持参したプレゼントを直接手渡しすることができず、「いったんテーブルに置いてくれ」と指示され、きわめて奇妙な感覚を持ったことを思い出す。

しかし、その後、急速な都市化の影響により、列車や満員バスといったところでは、どのようなカーストの人が隣にいるかもわからず、従ってカースト意識は次第に低くなっていった。あるいは、新しい職業が増加したために、これまでのカースト内の人々では扱わない職業領域が増えたことなども、カースト意識の低下につながったといわれる。

過去もそうであったが、現在もインドではカーストのことについてあまり触れたがらない人が多い。実際、法律上ではカーストは存在しないことになっている。しかし、現在でも結婚になるとカーストが問題になると指摘されている。従って今でも多くの結婚は両親が決めることが多いといわれている。私の担当した大学3年生のクラスの学生10人（男性6人、女性4人）では、そのうち親の決めた結婚を望む学生はクラスの中の男子学生2名程度で、その他はすべて恋愛結婚を望んでいた。

かつてはほとんど見られなかったことだが、現在異性との個人的な付き合いを持っている学生は実に多い。6名の学生が付き合っている異性がいると述べていたし、そのうち2名は「実際結婚を考えている」と話してくれた。昔の状況と比較してみるとほとんど考えられなかったことである。またブラーマン出身の女子学生は、母親が生理中食事を作らない、といったようなことは、「まったくない」と語った。「プレゼントを外国人から手渡されて、受け取らないことなど考えられない」と述べた。

いずれにしても、かつて見られた伝統的な社会意識は、近年ではますます希薄化しているように思われる。今後、インド経済の発展とともにそうした傾向が拡大することは明らかであろう。